

# 巻 頭 言

『言語と文化』第26号をお届けします。

大学院言語文化研究科附属組織としての本研究所が、すでにして26年の歳月を刻んだことが、この号数に表れています。歴代の所長のご尽力により、本研究所は学術・教育活動を推進してきましたが、研究所紀要としての本誌も、この中でこれまで斯界に一定の地歩を占めうる研究成果を示してきたものと自ら誇りに感ずるものです。

本号では、言語と文化のタイトルに照らせば、やや言語に傾いたきらいがなきにしもあらずですが、文化系2篇、言語系7篇の論考を収録することができました。また、近年、上部組織である言語文化研究科、および文学部で積極的に取り組みが行われている国際協働事業としての多文化教育の成果につき、その実践報告と総括に当たる1篇も載録することができました。いずれも厳格なる審査を経た論考なだけに、深い洞察に満ちた示唆に富む論究であることは論を待ちません。

各論考および執筆者の属性から見ると、本研究所研究費による共同研究成果が多くを占めることは、誠に喜ばしい限りで、本研究所の役割が着実に果たされていることを示すものと言えるでしょう。また、言語文化研究科及び文学部所属の教員以外にも、あるいは共同研究の形で、あるいは単独執筆の形で、さまざまな研究者にご執筆いただけたことも、本紀要が機関誌としてのみの位置から、広がりを持った独立した研究誌へと成長してきている証左でもあるでしょう。

ご執筆いただいた各位に感謝するとともに、本研究所の研究機関としての役割をさらに高めるべく、今後もお一層邁進したく気持ちを新たにす次第です。

巻頭に寄せて、一言贅言まで。

平成26年3月25日

言語文化研究所  
所長 白井啓介